

参加型社会をつくらう



一人のつながりを
デザインすれば
住民一人ひとりの
「やりたい」が
地域課題の解決に
つながる。

これは言いたいというメッセージ

——「参加型社会」への動きが生まれ始めている

アートも、教育も、福祉も、まちづくりも、これからは「参加」がキーワード。「アート」は色々な人が関わることで生まれるが、これまでのアートシーンでは、作家と作品が中心だった。ただ最近では住民が2万個の空き缶で作った家など、色々なかたちで「参加」の要素を入れるものが増えてきている。

——公共的な事業への「参加」を促そう

これまでは、住民が行政に税を払い、行政が公共的な事業を生み出して、住民に還元する社会だった。しかし今の時代は、行政だけで公共的な事業を支えることは難しい。行政もそのことを素直に言うべき。ただ、厳しい財政状況にあっても、国民は給付水準の削減をしたがらない。それなら住民にも協力してもらい、ともに支えてもらわなければならない。

——コミュニティ・デザインの可能性

行政が住民にしてほしいと期待していることは、防犯、道路清掃、地域福祉、社会教育。一方で、住民がまちのためにやりたいと思っていることは、音楽イベント、チャレンジショップ、コミュニティカフェ、ガーデニングなどで、双方にはズレがある。やりたいことをやっているだけでは趣味。自分たちがやりたいことをやっていたら、結果的にまちが良くなっていくのが理想。住民のやりたいことが、行政の求める課題解決につながるかたちに描き直すのがコミュニティデザイン。

全体を通じて印象的に感じたこと

——型破りの懇談会

今回の懇談会は、司会進行も相まって会議の進め方が毎回アクティブ。出てくる事例も面白かった。自分も知らない、成功するかどうかわからないものでも臆せず紹介され、この懇談会らしいと感じた。議論の中身として印象的なのは、「参加型社会」をどう作っていくのかという論点。国民が何らかのかたちで参加しないと、持続可能な社会にならないということが出てきた。

——社会を変える一歩の踏み出し方

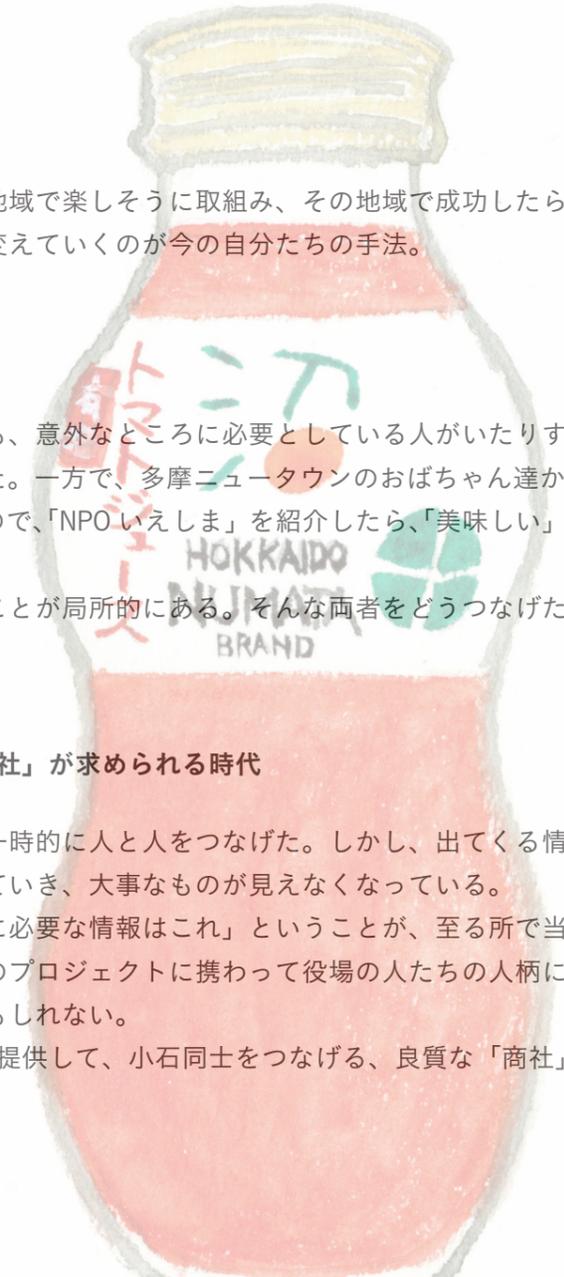
いきなり国を変えるのは難しい。だから、その地域地域で楽しそうに取組み、その地域で成功したら、次の地域へ行くということを繰り返しながら、全体を変えていくのが今の自分たちの手法。

——つなぐ役割を誰が担うか

ある人にとって、大したことのない技術や特産品でも、意外なところに必要としている人がいたりする。例えば兵庫県の家島では、昔は余った魚を捨てていた。一方で、多摩ニュータウンのおばちゃん達から「この辺は魚が高くて美味しくない」という話を聞いたので、「NPO いえしま」を紹介したら、「美味しい」と言って、アジを買ってくれるようになった。これだけ情報化が進んだ現代にあっても、そういうことが局所的にある。そんな両者をどうつなげたらいいのか考えないといけない。

——「手ざわり」と「つなぐ」を実現する「分権型商社」が求められる時代

経済成長とともにあった、情報化社会のプロセスは一時的に人と人をつなげた。しかし、出てくる情報の数が莫大になったので、今は流すように見ては忘れていき、大事なものが見えなくなっている。将来は、ウェブのテキストマイニングから「あなたに必要な情報はこれ」ということが、至る所で当たり前に出現するようになるだろう。それでも、沼田町のプロジェクトに携わって役場の人たちの人柄に触れなければ、トマトジュースを買うことはなかったかもしれない。情報量が多過ぎるからこそ、「手触り感」ある機会を提供して、小石同士をつなげる、良質な「商社」のような存在が求められるのかもしれない。



懇談会でやり残したこと

——「参加型社会」の実現に向けた具体化

「参加型社会」が大切だと言っても、その先を具体的にどうしていくのか、方法論や課題が議論できていない。参加者の議論を通じて「参加」というキーワードが見えてきたけど、もう少し深めておきたかった。

——都会のコミュニティ問題

都会のコミュニティは、つながりが希薄で、将来の姿はまだ見えない。農村型コミュニティには、まだソーシャル・キャピタルもあるが、都会は若さだけで走っている。皆が高齢者となった時にどうなるのか。

——人口減少社会と都市の高齢化

先日、ある地方に行った際、軒並みガラスが割れて廃墟となった建物が取り残されたエリアがあり、そのエリアで唯一のホテルに宿泊した。バブルの頃は、他のホテルとの激しい競争の中であって、自分だけが生き残ろうと競い合ってきたのだろうが、結果として、一人の勝者を残して、廃墟群ができてしまった。

日本には、壊して樹木を植えて去るという法律がないから、廃墟と化した建築物は、あとは自然に崩れ去るのを待つだけになる。

東京はまだいいが、それでも郊外には空き家や空室が広がりつつある。今はまだ圧倒的に廃墟は少ないが、将来は、都心部の周辺20キロに渡って廃墟の多い地域が出現することもあるかもしれない。

——日本の環境容量に相応しい、持続可能な人口規模を考えよう

日本は何人規模で生きていくのか考えないといけない。江戸から明治にかけての3,500万人という数字もあるが、バーチャルウォーターを念頭に、豊かに縮小するということも考えないといけない。日本という国の環境容量を考えた場合に、どの程度の人間を許容できるのか。持続可能な適正規模はどの程度かを考えないといけない。



次につなげる視点からどうすればよいか

——「参加なくして、未来なし」

今後に向けて、色々な人と話をしていくことが大事。また、「参加型社会」を本気で目指してみようというメッセージを出す意味は大きい。しかも、研究者ではなく、実践者がそこに気付いたのは大きい。

「参加なくして、未来なし」。これから、「参加」に特化した仕組みが作れるかどうか。意識改革も大事だし、その他にもやるべきことは色々ある。

参加型社会をつくらう